

河和田城跡

～水戸を代表する中世城館の堀と土塁の調査～

松浦 史明，新垣 清貴（註１）

【河和田城跡第 31 地点第 6 次調査概要】

所在地 水戸市河和田町字中城 985 番 14 ほか

調査原因 個人住宅建築に伴う本発掘調査

調査期間 平成 30 年 7 月 24 日～平成 30 年 10 月 17 日

調査面積 約 146 m²

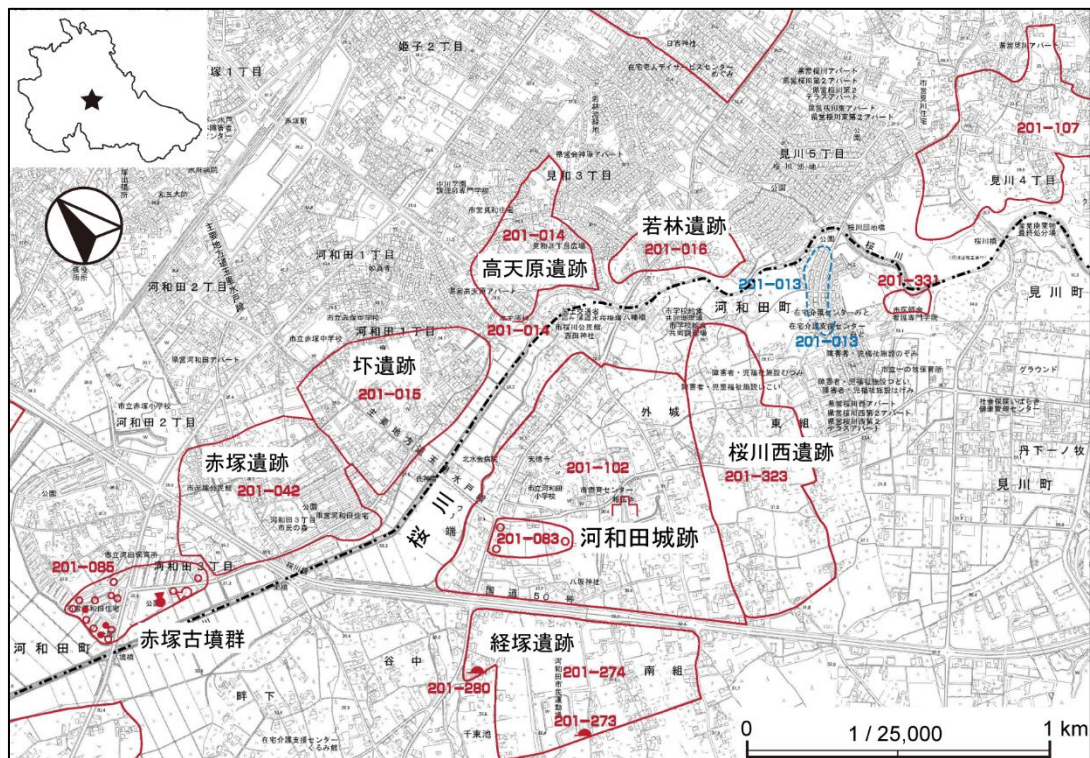
調査主体 水戸市教育委員会（担当：新垣清貴，松浦史明）

1 河和田城跡の位置と地形

河和田城跡は、水戸市河和田町に位置し、那珂川の支流である桜川の右岸，東茨城台地の北東部にあたる水戸台地を構成する千波台地（標高 30m 前後）の上に立地する。

その城域は、東に報仏寺，西に水戸市立河和田小学校，南に八坂神社，北に天徳寺を包含する（註 2），南北約 700m，東西約 400m におよぶ広大なもので，茨城県屈指の規模をもつ平城である。いま同遺跡周辺を歩けば，近年の市街地化にもかかわらず，土塁や堀が多く残存している状況を見ることができる。

同遺跡周辺では，特に桜川をはさんだ対岸の見和台地縁辺部において，上古からの土地利用を物語る遺跡が集中している。



第 1 図 河和田城跡の位置と周辺の遺跡

赤塚遺跡内で実施された国道 50 号バイパス建設等に伴う発掘調査では、旧石器時代の石器集中が検出されており、これが河和田地域での人類最古の足跡だと思われる。

縄文時代に入り、特に桜川左岸における土地利用が活発化したようで、高天原遺跡・坏遺跡・若林遺跡等では多くの遺構・遺物が確認されている。桜川右岸に目を転じると、河和田城跡周辺では縄文時代の遺構はほとんど確認されていないものの、今回の調査でも中世の生活面の下から縄文土器片を多く含む層が確認されており、何らかの土地利用が行われていたことは確実である。

その他、赤塚古墳群・街道端古墳群・高天原遺跡等の群集墳によって古墳時代の足跡を知ることができ、坏遺跡・赤塚遺跡等からは奈良・平安時代の遺構も検出されている。

このように、調査の進展によって河和田城跡の周辺における比較的安定した土地利用が明らかになっている。こうした社会的基盤の上に、地域の拠点として中世城館の河和田城が形成されたと考えられる。他方で、河和田城は中世における台地縁辺部から台地内部へと開発が進んでいく様相を示す好例とも言える。台地内部の開発においては水の問題が重要となるが、河和田城周辺は台地縁辺部からやや標高が下がることから、比較的地下水位が低く、城館を構えるには好立地であった。中世では、こうした城館とそれに伴う宿が結節点となり、陸上交通が発展していったのであろう。水戸城下から河和田城を通過して鯉淵、岩間へと続くいわゆる岩間街道（県道 30 号線）は、おそらく河和田城の造営と並行して整備されていたものであり、江戸時代に幹線道路の一つとして地図に描かれるとともに、大工町二丁目にある同街道の起点が「川和田横丁（町）（註 3）」と呼称されていたことも、陸上ルートの結節点としての河和田の性格を物語っている。

2 史料から見た河和田城

本節では、中世における河和田城の歴史的な位置づけについて、『新編常陸国誌』（宮崎報恩会編 1969）や『水戸市史』（伊東ほか 1963）等に基づきながら概観する。

河和田（川和田とも）の地名がいつから使われ始めたかは詳らかではない。承平年間年間（931～938 年）編纂の『倭名類聚抄』にみられる那珂郡洗井郷を「隠井（かくらい）郷」の誤りとして河和田付近に比定する説が広く行われているが、詳細は不明である。

平安時代以来、水戸地域に勢力を広げていたのは常陸平氏の大掾氏であるが、12 世紀の末頃に大掾職を継承した馬場資幹に 10 人の子があり、その第九子が川和田姓を名乗った（川和田九郎某）という。

河和田城の“築城”年代については、延元元（1336）年に大掾氏家臣の鍛冶弾正貞国（川和田入道）が城を築いたというものが定説化しているが、その他にも『佐竹大秘録抜萃』に「川和田城は箕川対馬守が大掾時代築く」といい、「村上家蔵書」には前述の川和田九郎某が始めて築くとあり（関 1955：50）、後述する江戸氏によって築城されたとする文書もある（宮崎報恩会編 1969：19）。いずれにしても、「城を築く」という行為が、増改築も含めて時宜に応じ複数回繰り返されることは全く不思議ではないから、大掾氏の時代に城館的な機能をもつ建物が建設された可能性は高かろう。

河和田城が“築城”された延元元（1336）年は、南北朝の動乱が本格化する時期と一致する。同年、大掾氏の多くと、常陸北部を支配する有力豪族の佐竹氏は、足利尊氏の北朝方につき、南朝方の楠木正家が拠る瓜連城（那珂市瓜連）を陥れた。この戦いで正家についた那珂一族が滅ぼされ、唯一残った那珂通泰が佐竹氏に服属し、江戸郷に移ったことで、江戸氏の祖となった。

その後、嘉慶2（1388）年の難台城の戦いで通泰の子の江戸通高が戦功をあげるも討死したことから、その恩賞として子の通景が鎌倉公方足利氏満から河和田・鯉渕・赤尾関などの大掾氏旧領を与えられたという。大掾氏はこの時、大掾職を継承したばかりの満幹が幼少のため、さしたる貢献が果たせなかったことから、氏満の不興を買ったとされる。

この時期、水戸地域における大掾氏と江戸氏の緊張が高まった結果であろうか、応永7（1400）年に大掾氏は拠点である馬場館（現在の水戸城）の城門を新築し、防備を固めている（藤木 1977：179）。河和田に入った江戸氏も同様に、何らかの築城行為を行った可能性は十分にある。前述した江戸氏による河和田城築城説も理由がないわけではない。

その後、応永23（1416）年の上杉禅秀の乱で禅秀側についた大掾氏は、禅秀の敗死とともにその威勢を大きく損なった。そうして起こったのが、応永33（1426）年頃の江戸通房による馬場館（水戸城）奪取事件である。その経緯を詳述する紙幅はないが、大掾氏の間隙を突いた通房の作戦は成功し、江戸氏が水戸地域の支配を確立していくことになった。

江戸氏の支配地域は、いわゆる中妻三十三郷（桜川流域から那珂川上流の那珂西にかけての地域。第2図参照）を旧来の地盤として、そこから那珂川下流域の常澄地域、そして涸沼川を越えた涸沼沿岸地域へと勢力を拡大していく。河和田城は初期の江戸氏勢力圏を押さえる要として、水戸城進出後も重要な位置を占め続けたであろう。

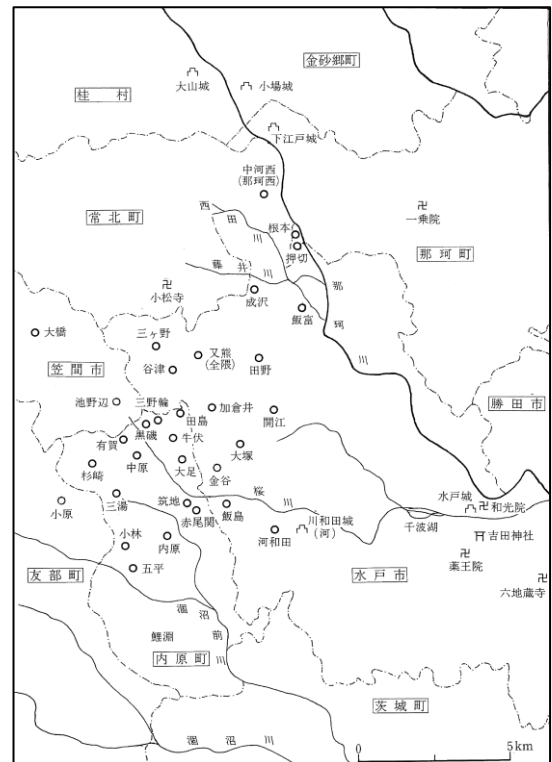
通房が水戸城に移った後、河和田城には嫡子の通秀が住んだが、23歳で早世した（宮崎報恩会編 1969：289）。その後、家臣の春秋氏が河和田城主になったというが、その時期についてはよく分らない。ただ、嘉吉3（1443）年に春秋幹安なる人物が父幹治の菩提を弔うために河和田に伝舜院を開いたとされており、水戸城奪取からそう遠くない時期に城主に任じられたのだろう。

春秋氏は、もとは鹿島郡にいた大掾氏の支族であつたが、江戸氏の河和田進出の際にその旗下に属したとされる。春秋氏時代の河和田城の動向についても史料が少なく判然としないが、以下にその足跡を辿ってみたい。

報仏寺阿弥陀像の台座にある文明13（1481）年の造像銘には、春秋幹勝が檀那として記載されており、この幹勝が河和田城を治めていた可能性が高い。

その後、江戸氏の当主通長の第二子である通式が春秋氏の養嗣子となり、春秋上野介を名乗った。通式は永正3（1506）年の願文で「平通式」と記載されており、江戸氏の本姓である藤原ではなく春秋氏の平姓を名乗っていることから、これ以前に春秋氏を継いだことが分かる。なお、通式は永正7（1510）年に下野那須氏の後継者争いの際に諸将とともに出陣した（宮崎報恩会編 1969：390）。

また、同じ年に佐竹義舜（よしきよ）が江戸通雅・通泰親子に出した血判起請文に記載された神々の中に「河和田八幡大菩薩」とあるが、これは春秋幹勝が建立したとされる



第2図 中妻三十三郷
〔『内原町史』より〕

八幡宮のことで、近世の元禄の頃に吉田神社に改称され、現在に至っている（伊東ほか 1963：611）。なお、吉田神社がある位置は城郭北東の鬼門にあたり、河和田城との関連が強く疑われるものの、確かな証拠はない。

その後しばらく河和田城の動向が追えなくなるが、天正 17（1589）年 4 月 12 日には、江戸重通が平戸弾正忠・嶋田中務小輔に軍勢催促を發し、中妻境目が不穩であるため、上野（植野）・長岡・大戸の兵を率いて河和田城の守備にあたれと命令している（註 4）。これは、前年に起きた江戸氏の宿老同士の武力衝突である神生の乱の際、敗れた神生氏を保護した額田城の小野崎照通との緊張が高まる中で書かれたものである。

そして、翌年の天正 18（1590）年、豊臣秀吉の小田原攻めに参陣した佐竹氏が秀吉から江戸氏所領の知行権を認められるも、水戸城の明け渡しを拒否した江戸重通は、水戸城北東の勝倉台で佐竹氏と戦ったが敗走し、水戸城を占拠した佐竹氏は、その翌日に江戸氏所領の十城十八砦を全て落城させたという。こうして、江戸氏の命運が尽きると同時に、河和田城も城としての役目を終えた。なお、勝倉台の戦いで戦死した武将の中に春秋上野八郎の名があり、この人物が河和田城主であった可能性もあるが定かではない。

以上が、およそ 250 年におよぶ河和田城興亡の略歴である。河和田城の歴史を時期区分するならば、I 期（大掾氏時代）、II 期（江戸氏時代）、III 期（春秋氏時代）、IV 期（落城後）に大別するのが穩当であろう。

他方で、具体的な築城・増改築の経緯や、城内外での生活等については全くと言ってよいほど記されていない。また関守部は「戦国末期に佐竹のため河和田城が亡されたときには、この地は兵乱の巷と化し数千の土民が殺戮され、多数の民家が焼かれた。その後人口は次第に減じて衰微の一途を辿るに至った」（関 1955：22）と記すが、落城前後の様子についても確かなことはよく分からない。

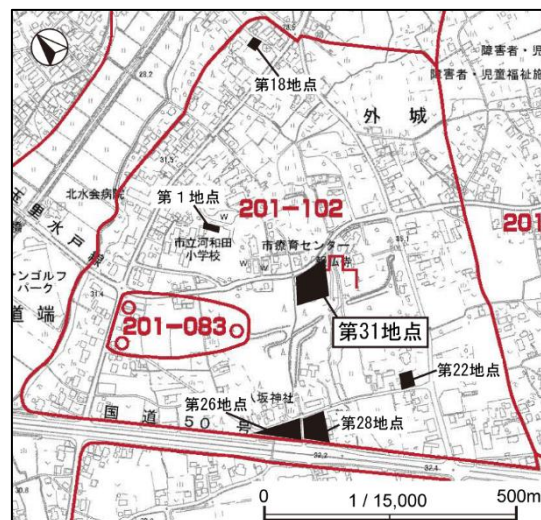
これらの、史料が語らない河和田城の歴史について、次節では、現在までの発掘調査で何が分かってきたのか見てみたい。

3 既往の調査

河和田城跡は、水戸市域の中世城館の中で最も調査が進んでいる遺跡の一つである。

昭和 37 年実施された小室栄一による実測調査を嚆矢として、以後、現在までに 40 地点を越える試掘・本発掘調査が行われている。このうち、本発掘調査の実施に至ったのは第 1・18・22・26・28・31 地点の 6 地点である（第 3 図）。

水戸市立河和田小学校敷地内にて実施された第 1 地点の調査では、河和田城跡における最初の土塁断ち割り調査が行われた。土塁底面から溝跡 1 条が確認され、この溝を埋める形で土塁の拡張が行われている可能性が指摘されている。第 18 地点は城域の北端にあたり、南北方向に走る溝によって土塁内がさらに区画されていたことが示唆されている。第 22 地点では、井戸跡と土坑群を主体とした遺構群が確認されており、城郭の外側における土地利用に関する知見が得られた。第



第 3 図 河和田城跡の本調査地点

26・28 地点は南西側土塁の外縁に位置しており、掘立柱建物 6 棟・方形竪穴 15 基・井戸跡 35 基等が多数切り合う形で検出された。本地点周辺は「西宿」という字名で知られ、往時は城下の宿として機能していたのだろう。

河和田城周辺の遺跡からも中世の遺構が確認されており、経塚遺跡では 16 世紀の所産とみられる堀跡や地下式抗等が集中して確認されている。桜川対岸の坏遺跡でも 15～16 世紀代に帰属する掘立柱建物跡や溝跡などの遺構群が発見されており、その盛衰を河和田城跡と同じくするものとして注目される。

これらの成果を踏まえつつ、河和田城跡第 31 地点では、初めて土塁と堀を一括して調査することとなった。

4 調査に至る経緯と経過

平成 28 年 6 月 7 日付けで、宅地分譲計画に伴い、事業者から水戸市教育委員会教育長あて、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会があった。当該地は実測調査等により土塁の存在が指摘されている箇所であり、その後実施された試掘調査によって土塁と堀跡等の遺構の存在が確認されたことから、事業者との協議の結果、各区画の個人住宅建築によって影響がおよぶ範囲について、本発掘調査が実施されることとなった。

当該分譲地は 9 つの区画で構成され、現在までに調査が完了したのは区画 No. 1・2・4・8 の 4 区画であり、試掘調査も含めると 6 次にわたる調査となる（第 4 図）。調査では、重機により表土を取り除いたあと、ジョレンやコテ、スコップ等を用いて人力で精査を行なった。特に、土塁の断ち割りや堀の覆土除去を全て人力で行ない、著しい湧水にも対処しながらの調査には多大な労力と時間を要したが、土塁の構築過程や堀の埋没状況を出土遺物と層位を記録しながら調査することで、重機を使用すれば得ることができない貴重な情報を多く記録に留めることができた。

5 調査の成果

（1）土塁の調査

土塁の検出作業を進めた結果、過去の造成工事等によるかく乱がみられるものの、実測調査等で指摘されてきた北西―南東軸に延びる土塁（SA01）の存在を確認することができた。土塁は高さ約 2.5m、幅約 8m で、調査区北西の部分において西向きに曲がる形状を示しており、南方の郭を圍繞するものと考えられる。さらに、区画 No. 2 において土塁に直交する形で土塁基底部の残存が確認され、補助的な機能をもつ土塁が存在した可能性を指摘できる。また、北側の土塁（SA02）は基底部のみが残存しており、かつては二重土塁であった可能性が強く示唆されるが、詳細は他区画の調査を俟ちたい。

SA01 の断ち割り調査は区画 No. 4・8 内の計 3 か所で実施した。土塁の断面を精査したところ、傾斜は北側が約 45 度の急斜面で、南側は緩やかになっていることから、この土塁は南方の郭を守るためのものであった可能性が高く、前述の土塁の形状とも齟齬のない結果となった。また、少なくとも 1 回の土塁拡幅が行われていることが明らかになり、土塁の下層から検出された溝跡を埋め戻す形で土塁の拡幅部が構築されていることが判明した。この事実は第 1 地点の結果とも符合する。また、第 1 地点と同じく溝跡の軸線と土塁の軸線が異なっていることから、この溝跡は最初期の土塁が構築される以前から存在した可能性もある。つまり、まず溝によって区画された土地があり、そこに最初期の土塁が構築され、そしてその後土塁が拡幅されたという順序が想定できるかもしれない。

遺物についてはまだ整理作業中であり、今後変更が加えられる可能性もあるが、拡張前の土塁積土中から出土した遺物は 15 世紀半ば～16 世紀前半代の土師質土器（カワラケ・内耳土器）及び陶磁器であり、拡張部の積土中の遺物は 15 世紀半ば～16 世紀後半の年代をもつ。第 2 節で述べた史料上の年代観に照らすと、土塁の構築と拡張は、ともに春秋氏時代に帰属する。

（２）堀跡の調査

SA01 の北側を掘り込んで構築された堀跡（SD02）は、幅 7.8m 程度、深さ 2.2m で、形状は箱堀である。調査中は絶え間ない湧水がみられ、往時は完全な水堀であったと推測される。堀の下層で中世の土師質土器皿（カワラケ）片を多量に含み、陶器片、漆器椀・羽子板等の木製品が出土した。覆土中層から上層にかけては 17 世紀前半から 18 世紀半ばにかけての陶磁器片や建築廃材、下駄、網代が含まれていた。このことから、廃城後の土地利用のなかで、長い時間をかけて堀が埋め立てられていったものとみられる。

（３）下層遺構の調査

土塁基底部の直下および内郭部分において、炭化材を含む黒色土の展開を確認し、これを中世の生活面と判断した。精査を行ったところ、この生活面を掘り込む形で掘立柱建物跡、土坑、井戸跡等が検出された。掘立柱建物跡の主軸方位は土塁とほぼ直交しており、土塁あるいは溝の区画を意識したものと考えられる。また、各遺構が重複している箇所が散見され、土塁構築前に少なくとも 2 時期に分けられる土地利用が想定される。



第 4 図 河和田城跡第 31 地点平面図

6 まとめ

河和田城跡第 31 地点の成果を整理すると、本地点における土塁構築および拡張は春秋氏時代に帰属する可能性が高く、土塁下層の掘立柱建物跡は 15 世紀前半、一部は江戸氏時代にさかのぼるかもしれない。他方で、14 世紀代にあたと確定できる遺構・遺物は

なく、大掾氏時代の土地利用の痕跡は見出すことができなかった。中世城郭の専門家である小室栄一は、河和田城を中世末期の平城と位置づけ、春秋氏時代と結び付けたが（小室 1965：253）、発掘調査によってそれが裏付けられたと言える。

想像をたくましくすれば、現在みられる河和田城の堀と土塁の姿は、天正 18 年の佐竹氏の攻撃やその前年の額田城攻め等の軍事的緊張が増す中で最終的に形成されたものかもしれない。およそ 250 年におよぶ河和田城の盛衰は、土塁と堀だけでなく下層遺構の精査によって初めて明らかになるものであろう。

また、各史料にみられる状況はあくまで支配層の盛衰に過ぎず、各遺構からは落城後も活発な土地利用がみられた。発掘調査によって、このような史料が語らない人々の痕跡の一端を明らかにできたことも大きな成果であると言える。

【註】

- 1 本報告における河和田城跡第 31 地点の主たる調査担当者は新垣清貴であり、調査成果の大部分は新垣の所見（新垣 2018）を取り入れたものであるが、文責は全て松浦にある。
- 2 報仏寺は元禄 2（1689）年に現在の場所に移された。河和田小学校は明治 10（1877）年に街道端で開校し、明治 32（1899）年、児童の増加により現在の地に移転された。八坂神社は、その由緒書きによれば延元 2（1337）年に河和田城の裏鬼門に牛頭天王を祀ったのが始まりという。天徳寺は正徳 2（1712）年に現在の場所に移された。
- 3 『新編常陸国誌』によれば、川和田横町はもともと南之横町と称しており、南方から水戸城に入る道なので古くから開けていたのであろうとしている（「南之横町」項）
- 4 平戸氏・嶋田氏は涸沼川流域、常澄地域の土豪で、江戸氏の水戸城奪取に前後してその旗下に属し、天文年間半ば頃からは江戸忠通による南方進出に貢献した。この文書に挙げられた上野（植野）・長岡・大戸の地もやはり涸沼川流域に位置する。

【引用・参考文献】

- 伊東多三郎ほか 1963 『水戸市史』上巻 水戸市役所
茨城県史編さん近世史第 1 部会編 1968 『茨城県史料 近世地誌編』茨城県
内原町史編さん委員会編 1996 『内原町史 通史編』内原町
江原忠昭編 1985 『改訂 水戸の町名——地理と歴史——』水戸市
近江屋成陽・宮崎賢司 2000 『河和田城跡—発掘調査報告書—』水戸市教育委員会
小川将之・関口慶久・川口武彦・新垣清貴 2007 『坏遺跡（第 3 地点）—ヴィヴァンコー
ト赤塚建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—』水戸市教育委員会・株式会社グリー
ン・ハウジング・株式会社地域文化コンサルタント
小室栄一 1963 「河和田城址」『水戸市史』上巻 水戸市役所
小室栄一 1965 『中世城郭の研究：関東地方に於ける築城遺構の実測とその諸問題』人物
往来社
新垣清貴 2018 「水戸市河和田城跡の発掘調査成果」『第 40 回茨城県考古学協会研究発表
会資料』茨城県考古学協会
関守部 1955 『上中妻河和田山根三ヶ村合併記念 東茨城郡赤塚村史』赤塚村
藤木久志 1977 「常陸の江戸氏」萩原竜夫編『江戸氏の研究』（関東武士研究叢書第 1 巻）
名著出版 175-354 頁
宮崎報恩会編 1969 『新編常陸国誌』常陸書房